全国同人雑誌評

●「婦人文芸」（東京都）101号

一〇一号と大台になった「婦人文芸」は、現代社会の様変わりを反映して、新鮮面が窺われる。とうやまりょうこ氏は、佐藤浩子とペンネームを変えての再登場だが、元々筆力のある書き手なので、読ませる力は折り紙付きである。ただ今号の「スポンの皺」はそこそこまとまっているものの、高揚感に乏しい。親しく、よく泊まりに来る男友達の突然の縊死を軸にしているが、死因もよくわからないままに相手の親に「できているかもしれない子供」のことを聞かれて、死をそのような形で片付けようとする姿勢に興醒めのうちにすべてが壊れていく崩壊感で終わっている。肉体を交えた者への喪失感もやや薄いし、その原因を追求して、死者を蘇らせ、意味を持たせようとする意思も希薄に感じられる。ただ、一つ意外に浮かび上がってくるのは、正規の社員でない臨時雇用の立場の労働の肉体的・心理的重圧である。この小説に表れるように、現在、このような非正規労働者が都会には想像以上に多く、彼らが何らかの形で追い詰められ、自死に追い込まれていくケースはかなり多いのかもしれない。それは小説作品よりもむしろその後に書かれた執筆メモに詳しく、このほうが問題の根をより鮮明にしているように思えた。

「コロナ後の傾向で、やはり非正規雇用者の自殺が多いという。しかも女性が多い。……日本の賃金は悪化し続けている……しかし雇用の問題よりも深刻に思うのは、価値の単純化である。恋人や結婚相手、愛する家族ということ以外に生きる価値を持ちにくくなっている。戦後の日本なら、世界平和とか、国を豊かにしたいとか、病者や貧者を救う医師になりたいとか、そう言った価値が尊ばれた。だから結婚せず、一人で生きていくこともできるし、価値の実現のために自ずと社会との接点を持ち得た。／だが、産業界の意向を色濃く反映した教育や大学に関する国の方針は、世界平和や豊かな社会を実現する人を育てるのではなく、内

需を支える消費者と、納税者たる労働者を産むためのものとなった。教養が忘れられた。……／また、家族や恋人という価値の押し売りは消費活動を促すためでもある。携帯電話などの通信、毎年のイベント、贈答品、旅行、民間保険すべて、赤ちゃんや子ども、愛し合う夫婦の出てくるCMであふれている。／このような環境で、仕事と家族（恋人）を持たない人の孤立感や孤独はいかほどであろうか。／愛する人に出会ってその伴侶とともに過ごすことが人生の価値の全てだと思っている人が、お金がなく結婚できず、安い賃金で独居していたら、自分を忘れたくて強いアルコールに手も伸ばすだろう。あるいは、孤独を忘れるために『自分を消す』選択を考えるかもしれない」この内容の方が説得力があり、男友達の自殺の原因をはっきりと言い当てている。難しいが、これを小説作品として結晶させるには、もう一工夫必要だろう。タイトルも小粒すぎる。

「東京ミラクル」（都築洋子）も問題の根を同じくしていて、労働事情の深刻な様変わりを下敷きにしている。日を遮られたのは、池袋駅の地下にいるホームレスとの親しい会話である。「おう、しばらく」と声をかけられたり、「コロナ禍にあってホームレスもマスク着用を求められる」ことや、「オレなんかワクチンも受けていないし、こんな人込みにいて換気も悪い地下で寝たり起きたりだけど、感染しないのは人間だけじゃなくコロナにも嫌われてるってことかね」と言う言葉には、新鮮な断面がある。結婚して憧れとして移り住んだ東京は、経済の悪化とともに生活を直撃し、ローンの破綻や夫の仕事の喪失によって、離婚に追い込まれ、崩壊していく。シャボン玉のように弾けた夢を回顧し、その儚さを現在の苦しい生活の中に辿りながら、最後に傷付いた一羽の文鳥に互いの傷を温め合う結末は、好感が持てる。タイトルが大袈裟すぎて無理があるが、一時期の日本経済の夢の名残りとしての追懐は描けている。ホームレスの男はもっと生かせた。準優秀作。

●「燧」（ひうち）（北海道）7号

「燧」は火打ち石を打つ意だが、その誌名のように、この誌には、奥に激しい強い意志が感じられ、硬いものが潜んでいる印象を受ける。妹尾純二郎氏への追悼号になっていて、その死が、小説「川の音」（妹尾雄太郎）の後半の軸にもなっている。この誌の発行自体が三二年ぶりということからして、純次郎氏の死が、小説にも同人雑誌発行にも大きな動機になっていることが窺われる。二〇〇枚を超えるボリュームのこの作品は、地味だが、手堅く、緻密で、その着実な刻印は、一つの地方の現実と、この世代の晩年の生き様をよく浮かび上がらせている。特に前半は精緻な筆致が地方の町や集落の衰微の実相を鮮明に伝えていて、生活の荒廃を、実感させてくれる。小説でなければできない伝達としてよく迫ってくる。遠く北海道に住みながら

ら飛行機で往復して認知症の母を介護する困難や、その母の症状に困惑し、戸惑う、長男の立場もよく描かれていて、日本中の多くの長男が直面している問題のように普遍的な面を見せてくれる。記憶を失っていく母親の姿も、生々しい。前半をこのままでうまく着地すればよかったと思うが、後半が弟の自死が、事件としてあまりに大きくなってしまって、全体がそちらに引っ張られる。これはもともとテーマが異なるので、いっしょにしない方が、整っただろう。後半はいろいろなものを盛り込み過ぎる印象が強くなり、また弟の死が原因がわからないまま宙に浮くので、一篇の作品としては、明確な焦点を結ばない。テーマの根となっている川の音も前半は響くが、後半は響かなくなっている。また、現代では実家の近くにいる者が両親の面倒を見、話し合いで家督も継ぐのが普通になっていると思われるが、その話し合いがなされないのも不自然なように見える。少し時間を置いて書いてもよかったかもしれない。この作品はもともと評価の域外にある佇まいを備えていると感じられる。

●**「amigo」（愛媛県）87号**

明るい華やぎのある誌で、鬱屈感から遠い印象は、この誌の特徴のように思える。楽しんで書いている雰囲気がある。長い小説が多く、巻頭の時代小説**「阿蘭陀通詞中山得十郎ヲロシヤ滞船中日記」（安部俊吾）**は前編で七八枚、**「診療所奇譚（続）」（岩崎正高）**も前編で四九枚、**「徳島青春物語（4）楡の木の下で」（舛田順一）**も一八枚と、賑わっている。

また万葉集についての観賞エッセイ**「ズームイン・万葉集（七）――想いをこめて――」（続木道子）**も長く続き、万葉集の短歌を現代の視点を入れてその世界が生き生きと浮かび上がるように書いている再生力豊かな文章は、万葉集を二倍楽しませてくれる。このようにわかりやすく、しかも当時が鮮やかに蘇ってくる書き方は、長年の万葉集への深い造詣によってのみ得られるものだろう。筆者の研究の蓄積が感じられると同時に、万葉集への深い愛情が漲っている。文芸思潮の短歌読者にも読んでほしい。推薦作である。

また全体の明るさは、作品の性格にも影響していて、**「照葉の森」（竹宮よしみ）**も読後感の晴れわたるすがすがしい作品になっている。両親に捨てられて祖母の手で育つ「さと」という女性が軸になっているが、両親への恨みと憎しみをどのように乗り越えるか、難しい問題に向き合いながら、安直な和解に走らず、手を緩めないで、高い昇華に達成させた手腕は注目に値する。こういうパターン的な題材は、筆を甘くすると、鼻持ちならない抱き合い小説になってしまうのだが、しっかり手綱を引き締めて宥和に向かわせる筆者の厳しさを伴った手腕は成功している。これは、「さと」を妻として温かく見守る夫の眼差しによって導かれると同時に、筆者の、人間や物事をやさしく包むように捉えるその眼差しによっても導かれている。豊かな読後感が残る、好短編。推薦作以上としたい。

●**「海馬」（兵庫県）45号**

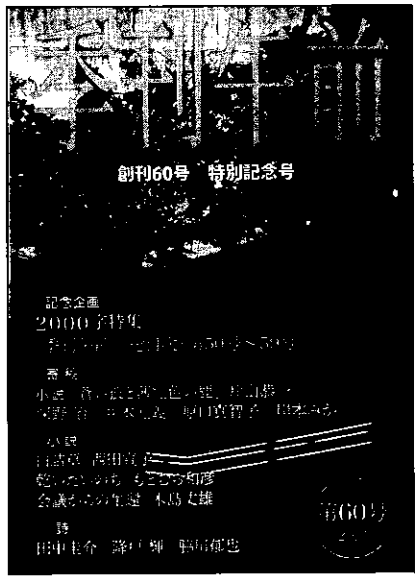
この誌は不思議な雰囲気を持っていて、現実と非現実の間（あわい）を何の抵抗もなく擦り抜けている自在な感覚がある。それは正常と狂気の間とも言えるし、この世とあの世の間とも言える柔軟な透過感である。三つの小説に共通した基盤が感じられ、**「レリビー」（吉岡辰児）**にも、**「不能者」（山下定雄）**にも、**「陰と陽の肉体（前半）」（永田祐司）**にも共通している。

特に「不能者」は精神の病を抱える主人公が、同棲するカンナという愛人を置いて、精神病院に入院するだけに、その間の危うさが際立った小説になっている。カンナ

全国同人雑誌振興会

との関係がこのままだとダメになる危機を覚えて精神病院に自ら入るのだが、そこでまた女性看護師と観念的恋愛の火花を散らせる。「私がもし正気であるなら、彼女も正気であり私が狂気であるなら彼女も狂気であろう。私はその眼差がどのような色合に燃えているのであろうかとおもうだけで身内がかっかと火照ってどうにもこうにも収拾がつかない混乱を覚えた」――読者はこうした異質な世界に巻き込まれ、絡み取られていく。精神病院での看護師との恋愛など現実には難しそうであるにもかかわらず、その激しい異様な叙述によって、否応なく踏みしだかれていく。それは事実から遠い世界でありながら、激しい燃焼力によって、現実に置き換えられていく。これは普通のリアリズムとは違った、妄想の強さによるリアリズムである。確かにこれは一つの陶酔を呼び、ある強度を持った世界であるにはちがいないが、それが現実の世界に還元されるかと問われたとき、明確に答えられないもどかしさが残る。それは確かな狂気であって、確かな現実ではない。酩酊の深さはあるが、戻って覚醒するための回路がない。むろん、現実そのものが幻なのだからそのまま行ってしまうだけの回路があれば、それで十分ではないか、とも言えるが、また戻ってくる回路によって、現実そのものが逆に強固になる側面も否定できない。この独特な「ワールド」をどう捉えるか、評価の違いが予測される。推薦作としたい。

●「季刊午前」（福岡県）60号



「季刊午前」も60号を迎えた。心からの祝意を贈りたい。洗練された誌面と毎号の工夫された企画は、同人雑誌のあり方の一つの見本となるだけの姿を備えている。今号は「二〇〇〇字特集」で、それぞれが創意を凝らした文章を紡いでいる。よくできた短編が揃っていて、大いに楽しめる。さすがに皆芸達者とあらためて感じさせられた。

60号ということで、故北川晃二を追悼しエッセイも記念を深め、「季刊午前」の奥を潤わせている。こういう潤滑が、また未来への企投を大きくするものと思われる。

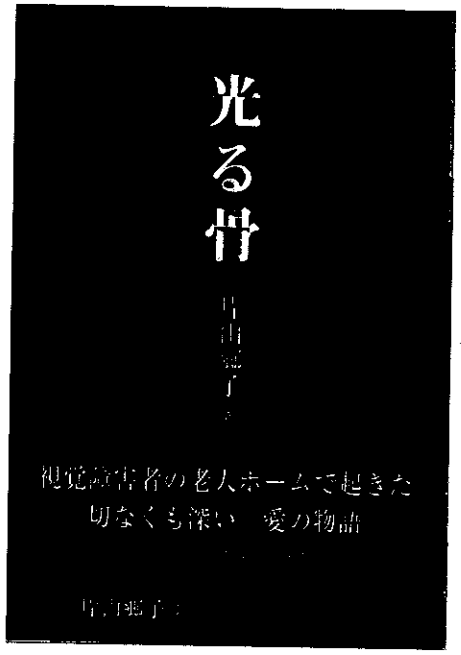
西田宜子氏の**「白詰草」**は、老年の一つの姿が自然な流れで書かれていて、雰囲気よくまとまっている。華々しい花より野の花に魅かれる自分の絵の拘りも、ストーリーにうまく溶け込んでいる。周囲の喫茶店経営者の友人もその夫の画家もそれぞれ個性を持って老年への流れを自然に醸し出している。無理をしない素直な筆が、この受容的な老年の姿勢によく合い、それが自然や死や終末を大きく受け入れて、遥かなものへ溶け込んでいく広がりを感じさせる。優秀作としたい。

「会議からの生還」（木島丈雄）は、企業内部の状況がリアルに描かれており、その迫真力は稀有なものがある。どの企業もこうした激しいやりとりのうちに成り立っていると想われ、このリアリティには新鮮さを感じる。文学や小説としてはもう一つ欲しい気もするが、ここまで出した迫真力は讃えたい。準優秀作。

今季をまとめる。

優秀作　**「白詰草」**（西田宜子）「季刊午前」60号
推薦作　**「不能者」**（山下定雄）「海馬」45号
「ズームイン・万葉集（七）―想いをこめて―」（続木道子）「amigo」87号
「照葉の森」（竹宮よしみ）「amigo」87号

准優秀作

「東京ミラクル」（都築洋子）「婦人文芸」101号
「会議からの生還」（木島丈雄）「季刊午前」60号

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）